

「宇宙のダンス」

斉藤みず希

登場人物

田中丈^{じょう}（16） 高校一年生

松木葉助（50） 会社員

南一真（16） 丈の親友。サッカー部員

田中讓^{ゆずる}（13） 丈の弟

田中愛子（48） 丈の母

松木美優（17） 葉助の娘

松木理恵（45） 葉助の妻

山口清（51） 愛子の社交ダンス仲間

○城北高校・全景

チャイムの音。

○同・1年A組の教室

生徒たちの話声で騒がしい。

女子生徒数人が教室の後ろでダンス動
画を撮っている。

その様子を横目で見ている田中丈（1
6）、ヘッドフォンをしながらスマホ
で音楽を聴いている。

生徒A「何聞いてんの？」

丈の後ろの席の生徒が、ヘッドフォン
を勝手に外し、耳元に大声で話す。

丈、音にビクっとなるが無然とした顔
で無視する。

生徒A「無視すんなよ」

生徒B「やめとけて」

丈、ヘッドフォンを耳にかける。

生徒B「そいつ、宇宙人だから聞こえないん
だよ」

女子生徒「ちよつと聞こえるよ」

生徒B「大丈夫でしょ。（両耳を押さえる仕事）これしてるんだから」

丈「……………」

丈、スマホの音楽の再生ボタンを押す。

○田中家・全景（夜）

よくある2階建ての一軒家。

○同・玄関（夜）

傘スタンドの近くに置かれた松葉杖。

○同・リビング（夜）

テレビを見ている丈と弟の田中譲（13）

リビングのドアが開き、田中愛子（48）が髪をタオルで拭きながら入って来る。

愛子「丈、玄関のあれ、どうすんの」

丈「どうすんのかって」

愛子「いつまで置いてくの。邪魔なんだけど」

丈「使ってるんだけど」

愛子「使ってるって・・・小道具？演劇部にで

も入ったの？いらぬならメルカリにでも

出しちゃいなさい」

丈「・・・邪魔なら部屋に置くよ」

愛子「だってもうとつくに治ってるじゃない」

譲「(たしなめるように)お母さん」

丈、無視してリビングを出る。

○同・玄関(夜)

丈、靴を履き、松葉杖を持つ。

玄関をボタンと閉める音。

○家の近くの道(夜)

丈、松葉杖を右手に持ち、右足をかば

う様にして歩く。

○公園の広場(夜)

小さなステージのある公園。

ステージの上に座り込む丈。

空には星が見える。

横たわった松葉杖。

丈、立ち上がり、その場で大きくジャンプする。

右足に何の支障もなく、着地。

丈「だよな」

スマホでダンス動画のアプリを開く。

クラスの女子が踊っている動画。

丈「下手、下手、下手くそ」

丈、その場で動画のダンスを完璧に踊る。

丈「こんな簡単な踊りもろくに出来ないくせに」

丈、スマホを床に置き音楽をかける。

スローテンポのダンスナンバー。

音楽に合わせて切れ良く踊る丈。

○同・公園（夜）

望遠鏡を構えて空を見ている松木葉助

(50)、叫ぶ。

葉助「あー！あー！あー！あー！」

ステージで踊っていた丈は声に驚き動きが止まる。

葉助「出た！見た！ついにつ」

丈、葉助を見て怪訝な顔。

丈「やべえやつだ」

興奮状態の葉助と目が合う。

丈、目をそらし上着を着て身支度をす
る。

葉助「そこの君！見た？」

丈「何がですか」

葉助「今光った！UFOだよ」

丈「見てません」

無視して行こうとするが、葉助は近
づいてくる。

葉助「ダンス上手いんだね」

丈「・・・見てたんだ」

葉助「君のダンスで呼ばれたのかも」

丈「はい？」

葉助「宇宙人の好きなものはダンスなのかも
しれない」

丈「本格的にやべえ」

葉助「そう、やべえんだよ！50年生きて来て初めて見た」

丈、また無視して行こうとする。

葉助「宇宙人に会いたくない？」

丈、振り返る。

葉助「仲良くなりたいと思わない？」

丈「思わないです。俺、宇宙人なんで」

葉助、驚きの後、笑顔になる。

葉助「それってもしかして」

丈「あ、いや、違う・・・そういう意味じゃない」

葉助「宇宙のダンスだね」

笑顔の葉助。

床に置かれた丈のスマホ画面。動画のアプリの中で楽しそうにダンスする人の動画が再生されていく。

葉助「あ、このアプリおじさんも入れてる

よ」

丈「へえ〜・・・」

葉助「おじさんが若者文化に無理についてこ
うとしちゃって、ダサいって思った？」

凶星を突かれ、目を逸らす。

丈「いや、別に」

葉助「わかりやすいよ、君」

丈、葉助の言葉に目を見開く。

丈「そんな事初めて言われた」

ぼそつと呟く。

葉助「ん？何か言った？」

丈「いや別に」

葉助「このアプリ、娘がよくやってるから」

丈「こっそり動画を見てるんですか？」

葉助「何でわかるの」

丈「いや、そういうの親に見られたら嫌だ

し、自分から見せたりしないかなって」

葉助「そうだよな〜」

丈「気持ち悪いですよ」

葉助「だよな〜」

丈「あ・・・俺、帰るんで」

丈、ステージから降りて歩きだす。

ふと何かに気づき振り返る。

葉助が松葉杖を持って笑顔。

葉助「忘れ物」

丈、受け取ろうとするが、葉助が手を

よけて空振りする。

丈「あの」

葉助、丈に松葉杖を渡さない。

丈「返してください」

にやにや笑っている葉助。

葉助「おじさん、バズりたいんだよね」

丈「は？」

葉助「こんな風に踊ってバズってみたい」

葉助、自分のスマホの動画を見せる。

若い女の子がダンスする動画。

葉助「バズったダンスを踊ってここで宇宙人

を呼ぶんだ」

丈「はあ」

葉助「色々と脳の刺激にも良さそうだし」

丈「刺激って、ポケ防止みたいな事っすか」

丈、松葉杖を取ろうとするが、かわされる。

葉助「あともう一つ。バズったら娘が見てくれるかも」

丈「娘さんへのアピールですか」

葉助「正解。でも僕は踊りなんて中学校のフオークダンスくらいしか経験がない」

丈「はあ」

葉助「だからダンスを僕に教えて欲しい」

丈「えっ何で俺が」

葉助「ダンス、上手だから」

丈「いや、おかしいでしょ」

葉助「何が？」

丈「何もかもがおかしい」

葉助「そうかな」

丈「おかしいと思わない所がおかしい」

葉助「君を信用してるから」

丈「いや、俺はあなたを信用出来るわけなし。一体俺の何を知ってるっていうの」

葉助「宇宙人」

丈、かっとなり葉助から松葉杖を奪い
取り、足早に去っていく。

丈の背中で葉助が叫ぶ。

葉助「2日後の同じ時間にここに集合！待っ
てるから！」

○帰りの道（夜）

松葉杖を抱え早足で歩く丈。

丈「何なんだあのオヤジ」

○田中家・丈の部屋（朝）

目覚まし時計の音。

気だるそうに起きる丈。

目覚ましを止める。

部屋のメタルラックに松葉杖が立てか
けられている。

○城北高校・運動場（夕）

運動部がそれぞれ部活動をしている。

ジャージ姿でサッカーボールを蹴る南

一真（16）、華麗にゴールを決める。

その姿を少し離れた場所から見ている

丈。

一真の近くにいるサッカー部員Aが一

真にボールを渡す。

部員A「また来てるよあいつ」

一真「あいつって・・・」

部員A「A組の田中だっけ。一真、中学の時

同じクラスじゃなかった？」

一真「・・・いたかな、田中」

部員A「入部希望じゃないよな」

一真「足、怪我してるのか」

部員A「それ半年以上前らしいぜ」

一真「でも、松葉杖ついてる」

部員A「とっくに治ってるはずなのに、何考

えてるか分かんないってA組のやつが言っ

てた。なんだっけ、あれみたいって」

思い出せず考え込む。

一真「宇宙人・・・」

部員「そう！宇宙人だ」

一真、丈を見つめる。

目が合い、慌ててその場を去る丈。

丈の後ろ姿を見つめる一真。

○丈の部屋（夜）

丈、スマホで動画サイトを観ている。

「高校生ダンス選手権 決勝」と書かれたテロップ。

映像の中には生き生きダンスする高校生の姿。

優勝者がトロフィーを受け取り、弾ける笑顔を見せている。

丈、暗い顔で動画サイトを閉じる。

検索サイトで「爆弾 作り方」「地球滅亡」など不吉なワードを調べる。

丈、ふと思い立ち

「宇宙人 呼び方」で検索する。

検索ワードで出て来たサイトを読む。

丈「宇宙人なんて、呼べるかよ」

ドアの向こうから譲の声。

譲「丈兄いる？」

丈「いるけど何？」

譲「開けるよ」

丈「開けんな」

譲、聞かずにドアを開ける。

丈「開けんなって」

譲「これ、ごみ箱に落ちてたけど」

譲の手には宇宙人のフィギュア。

丈「ごみ箱にあるんだからごみだよ」

譲「でもこれって」

丈「欲しいならやるよ。メルカリで売っても

いいし」

譲「売れないよ、いらないし」

丈「じゃありサイクルショップ」

譲「面倒くさい」

丈「じゃあ捨てる」

譲「自分で一真くんに渡せば」

丈「……」

譲「何か思い出すかもしれないじゃん」

譲、宇宙人フィギュアを机の上に置く。

譲「人の物を勝手に捨てたらダメでしょ」

譲、部屋から出ていく。

丈、置かれたフィギュアをじつと見る。

○テロップ

「1年前」

○公園の広場（夜）

ステージの上で切れのあるダンスをする丈。

サッカーボールを持った一真がその姿を見つめている。

一真、にやりと笑い、ボールを丈に向けて蹴る。

コロコロ転がるボール。

ダンスを止める丈。

丈「おい」

一真「手が滑った」

丈「いや、蹴っただろ」

一真「足が滑った」

丈「下手くそなエースだな。もっと鍛えた方がいいんじゃない？」

丈、ボールを蹴り返す。

大きく逸れて転がるボール。

一真「うるせー、サッカー素人」

丈、苦笑いでボールを取りに行く。

一真「俺、高校行ってもエースを狙うよ」

丈「俺はダンスの世界大会目指す」

一真「丈がバキバキに踊ってる姿見たら、皆驚くだろうな」

丈「皆って誰」

一真「親とか家族とか、クラスメイト？」

丈「いいよ別に」

一真「イメージ変わると思うな」

丈「変える必要がある？」

一真「変わった丈を見て驚く皆の姿が見たい」

丈「見たいかあ、そんなの」

一真「見たいよ。それって俺だけの特権じゃん」

丈「（嬉しそうに笑い）変な特権」

一真「お母さんにくらい言ったら？喜ぶよ」

丈「いいよ、言ったら多分呆れられる」

丈、サッカーボールを一真に渡す。

丈「俺は王道の息子じゃないから」

一真「王道って？」

丈「一真とか弟の譲みたいな。ザ・自慢の息子じゃない。何考えてるかわからない。きつと宇宙人だと思ってるよ」

一真「宇宙人か」

一真、ボールを置き、両手を空に向かって上げる。

一真「ベントラー、ベントラー」

丈「おいおい、どうした」

一真「宇宙人を呼ぶ言葉だよ」

丈「（笑って）呼んでどうするの」

一真「宇宙人とサッカーする」

丈「宇宙人でボール蹴れるのか？」

一真「丈は宇宙人と踊りたくない？」

丈、考える仕草。

丈「踊りたくねえ——」

ゲラゲラ笑う丈と一真。

○テロップ・半年前

○田中家・全景（朝）

バタバタと階段を降りる音。

丈が慌てて降りてくる。

愛子「何、どっか出かけるの」

丈「ちょっと」

愛子「フラフラしてないで、暇なら家の事でも手伝って」

丈、無視して出て行く。

○近くの道（朝）

早歩きで歩く丈。

丈「やばい。結構ギリギリ」

スマホで見ているのは「全国高校生ダンス選手権」と書かれたサイトの地図。

○交差点前（朝）

歩行者側信号は赤。

丈、横断歩道で信号待ちをしている。

丈のスマホが鳴る。

譲から着信。

丈「何？今急いでて」

譲の声「お兄ちゃん、落ち着いて聞いて。一

真くんの妹から聞いたんだけど、一真くん

が車に轢かれて病院にいるって」

丈、驚き表情が固くなる。

丈「どこ？」

譲の声「え？」

丈「病院どこ？」

丈、譲と電話で話している。

信号が青に変わる。

丈、来た道を走って戻って行く。

○歩道橋（朝）

階段を駆け上がる丈。

橋を渡り、下り階段の前で走って登ってきた子供とぶつかりそうになり、とっさによける。

バランスを崩して階段から落ちていく。ゴロゴロと転がり、一番下まで落ちる。

丈「（声にならない声で）痛えーっ」

横たわる丈の側で先ほどの子どもが心配そうに見ている。

丈「大丈夫、大丈夫」

立ち上がる丈。

丈「ほら、ジャンプだって出来る」

着地した瞬間、丈の顔が歪む。苦笑いで足を引きずりながら早足で去る丈。

○総合病院・全景

出入り口では人が頻繁に出入りしている。

○同・受付

カウンター前に来る丈。

丈「一真！・・・南一真って人がここに運ば

れたって聞いて。大丈夫なんですか？」

○同・一真の病室

中に入る丈。

ベッドに座り漫画を読む一真を見つけ

安堵の顔。

丈「漫画読む元気あるのかよ」

丈を見て、真顔の一真。

丈、一真の肩を叩き、おどけて

丈「おい、日本語しゃべれなくなった？」

一真「えーと・誰？」

丈、笑顔が引きつる。

○（回想戻り）公園の広場（夜）

葉助、ステージの端に座っている。

慣れない手つきでタバコを出しくわえる。

火を点けて吸ってみるが、咳き込む。

丈の声「タバコ、吸った事ないの？」

葉助、振り返ると丈が立っている。

葉助、咳き込みながら微笑み

葉助「ヘビースモーカーだよ」

丈「どこが」

葉助「どう見てもタバコの似合う男でしょ」

丈「今、タバコは煙たがられるよ。くさいし」

葉助「喫煙者には辛いね。どんどん値段も高くなるし」

丈「やめなよタバコ。体に悪いし、何より似合っていない」

葉助、ハツとして丈を見る。

○葉助の記憶

松木理恵（45）の声がする。

理恵「タバコなんて吸うの？体に悪い。全然似合わないよ」

葉助に微笑む理恵。

○公園の広場（夜）

丈を見上げ、微笑む葉助。

タバコの火を消し、携帯灰皿に入れる。

葉助「タバコ吸うの、50年生きて来て2回目」

丈「めちゃくちゃビギナーじゃん」

葉助、苦笑い。

葉助「いつもと違う事を始めたくなってね」

丈「それでタバコ？」

葉助「別に何でもいいんだ。この年になると新しく何かを始めたたり、挑戦するのが億劫になる」

丈「別に年とってなくても同じだと思うけど」

葉助「そういう物なのか」

丈「そういう物っていうか怖いっていうか」

葉助「怖い？」

丈「人と違う事したり、変な事したらダサい奴って思われる」

葉助「ダサい奴ってダメなの？」

丈「だめでしょ」

葉助「じゃあ、君の持ってるそれは？」

葉助、丈が持っている松葉杖に目をやる。

葉助「それ、なんかダサいけど」

丈「怪我人だから」

葉助「怪我人か。キレキレダンス踊れるじゃない」

丈「踊れるけど必要っていうか・・・精神安定剂的な・・・」

葉助「それが無いと出来ない事って二足歩行以外にあるの？」

丈「・・・」

葉助「そういうの無い方が身軽になっていいかもよ。風邪も薬じゃなくて自分の免疫力で治すっていうじゃない」

丈、松葉杖を置き、立つ。

丈「俺、みんなから宇宙人って言われてる」

葉助「それでこの前自分の事を宇宙人だって言ったの？」

丈、頷く。

丈「俺からしたら周りのやつこそみんな宇宙人に見える」

葉助「宇宙人がそんなに沢山いたら困っちゃ

うな」

丈「理解し合えない存在って事」

葉助「ごめん。わかるよ、意味」

丈「そんななのに松葉杖ついてたら、人の

気が引けるかも、とか」

葉助「気を引きたい人がいるの？」

丈「いる。けど・・・いなくなった」

葉助「・・・そっか」

葉助、松葉杖を持ち

葉助「とにかくこれはおじさんが預かろう。

僕のダンス動画がバズったら返してあげる」

丈「それ、一生返って来ないんじゃ」

葉助「それか、宇宙人とダンス」

丈「絶対返ってこないな」

○田中家・リビング（夜）

テーブルに並んだ弁当2つ。

向かい合って食べている丈と譲。

譲「今日、母さん遅いって」

丈「聞いている」

譲 「明日も遅いみたい。仕事じゃないらしいけど」

丈 「うん」

譲 「松葉杖、捨てたの？」

丈 「捨ててはない」

譲 「ふーん、売ったとか」

丈 「別にいいだろ、そんなの」

譲 「ああいうのって、意外と買うと高いじゃん。母さんは売れとか言ってたけど売れんのかなって」

丈 「売れるんじゃない。何でも売れる時代だし」

譲 「でも兄ちゃんの手汗ついた松葉杖とかさ

あ

丈 「確かに。自分に置き換えるとちよつとな」

譲 「もう無くても大丈夫なんだ」

丈 「とりあえず、今は人に貸してる」

譲 「え、じゃあ返ってくんの？手汗ついた松

葉杖」

丈 「戻って来ないと売れないよな」

譲 「売れるかねえ」

丈、渋い顔で唐揚げを食べる。

丈「この弁当の唐揚げ、味濃いな」

譲「そう？レモンかければ」

丈「かけねえよ、レモンなんて」

譲「かけた方が体にいいし」

丈「どこの健康おばさんだよ。中学生」

譲「健康な方が体も動く。ダンスも踊れる。

でしょ？」

丈「やっぱレモンかけてみよ」

譲「俺がかけてあげる」

丈の唐揚げにレモンを絞る譲。

丈「おい！かけすぎ」

○城北高校・1年A組教室

生徒たちの声で騒がしい。

丈、ゆっくり歩いて教室に入る。

お喋りをやめ、丈の姿を見つめる生徒達。

席に座る丈。

ヘッドフォンを着ける。

生徒A「杖無くても歩けるんじゃない」

生徒たち、ひそひそと話している。

丈「聞こえてんだよ」

丈、ポツリと小さく呟く。

スマホの音楽の再生ボタンを押す。

聞いているうちに足でリズムを取る。

○スターパレス城北（夕）

広くて比較的新しいマンション。

○松木家・リビング（夕）

葉助がソファで真剣に本を読んでいる。

テーブルの上にも本が何冊か並んでいる。

「宇宙のひみつ」「宇宙人の謎」等の
タイトル。

リビングのドアが開いて松木美優（1
7）が入って来る。

美優「ただいま」

葉助「おかえり」

美優、鞆を置き、キッチンへ来る。

冷蔵庫のお茶をコップに入れて飲む。

美優「またそんな本読んでのの？」

葉助「うん」

美優「そんな事よりこれ。昨日の夜、お母さんの日記出してみた。読んでおいて」

美優、鞆から出してテーブルに置く。

葉助「日記？いいよく怖い。どんな文句が書いてあるか」

美優「その文句から思い出す事もあるかもしれないでしょ」

葉助「そうかなあ」

美優「どれくらい今覚えてるの？」

葉助「怒った顔と不機嫌な顔」

美優「お母さん可哀想。もっと可愛い顔とか、ドキドキした思い出も覚えてて欲しいだろうなあ」

葉助、困ったような笑顔。

美優「別のお医者さん行ってみる？セカンドオピニオン」

葉助「いや、いいよ」

美優「何で？」

葉助「どこ行っても同じ。脳には問題ないみたいだし」

美優「でも・・・」

葉助「なあ、お父さんダンス始めようと思ってるんだ」

美優「ダンス？社交ダンスとか？」

葉助「いや、イマドキのカッコいいやつ。動画サイトとかで流行りの」

美優「そんなのお父さんには無理でしょ」

葉助「無理じゃない、バズらせてやる」

美優「はあ、そんな言葉知ってるんだ」

葉助「いい先生も見つけたし」

美優「先生ってお医者さん？」

葉助「違うよ。医者なんかよりよっぽどすごい先生」

美優「勝手にすれば。運動は記憶に良さそうだし。あ、日記は読んでおいてね」

バタバタとリビングを出る美優。

葉助、理恵の日記を手取る。
ページを開こうとするが、思い直して
やめ、日記を置く。

○公園の広場（夕）

葉助がステージの隅でスマホの動画を
観ながら身振り手振りで踊っている。

丈の声「おじさん、センスないね」

葉助が後ろに立っている。

ダボつとした服にキャップを被りゆる
い服装。

葉助「やあ、どう？二足歩行には慣れた？」

丈の声「何ですかその言い方。嫌味？」

葉助「ごめんごめん。ついこういう遠回しな
言い方しちゃうんだ。娘にもよく怒られる」

丈「別に嫌味なんて慣れてるから大丈夫だけ
ど」

丈、帽子を被り直す。

葉助「今日はだいぶイメージが違うね」

丈「服ですか？いつもこんな感じだけど」

葉助「今まで制服だったから」

丈「こつちの方が踊りやすいから」

葉助「いいねえ。僕も今度から着て来ようかな」

丈、無視してスマホを見る。

丈「今踊ってた動画、これ？」

自分のスマホの画面を葉助に見せる。

葉助「そうそう、これこれ。よくわかったね」

丈「これ良くある定番のヤツだし」

葉助「そうなんだ。じゃあ簡単だ」

丈「いや、簡単だけど、簡単じゃない」

葉助「どういう事？」

丈「踊る人によるとしか」

葉助「なるほど、中々長い道のりなわけだ」

丈「ていうか、本当にこんなんで宇宙人呼べるとか思ってるんすか」

葉助「わからない」

丈「そりゃ、わからないだろうけど」

葉助「呼べなさそうだけど、呼べるかもしれないじゃない。〇パーセントでも可能性

があるどうかは誰にもわからない」

丈「わからないけど、無謀だし、タイパ悪い
っすよ」

葉助「タイパ？タイのパーティー？」

丈「タイムパフォーマンス。時間効率の事」

葉助「そんなの今から気にしてるの？」

丈「時間は有限なんで」

葉助「記憶も有限だよ」

丈「記憶？」

葉助「人間は忘れる生き物だから、ものすごく嬉しい事も、悲しい事も、腹が立った事も、いつかその記憶は薄れていく」

葉助、タバコを一本出し、丈に見せる。

葉助「もし僕がヘビースモーカーなら、記憶喪失になってもこのタバコをカッコよく吸ってみせる。でも経験が少ないからわからない」
丈「経験2回のビギナーですもんね」

葉助「だね。経験が記憶を生むことがあると
思うんだ」

丈「生む？作るじゃなくて？」

葉助「体が勝手に動いてしまうような経験。

それくらい頻繁に取り組めば記憶に刻み込まれて、行動として生まれる」

葉助、タバコを吸わずに携帯灰皿にしまう。

葉助「君のダンスもそうじゃないか？怪我してるふりしても、いつの間にか体が動いてなかった？」

丈、自分の足元を見る。

葉助「丈くんのダンス。初めて見た時に思い出したんだ、妻の事。妻の怒った顔」

丈「奥さん？俺のダンスで？」

葉助「ああ、だから君は本当に宇宙人で、宇宙からプレゼントを持って来たのかと思っ
たよ」

丈「あのお」

葉助「あ、またヤバいおじさんだっと思って
る？」

丈「はい。そもそも何で奥さんの事忘れちゃ
ったんですか？それって・・・」

葉助「妻は3年前に死んだみたいなんだ」

丈「・・・みたい？」

葉助「それで僕は半年前に事故で妻の記憶だ

け無くしちゃったんだ」

丈、言葉を失い、葉助を見つめる。

葉助、日が暮れていく空を見上げてい

る。

○田中家・丈の部屋（夜）

ベッドに寝転がる丈。

机の上のエイリアンのフィギュアを見

つめる。

丈・モノローグ「忘れられるより、忘れてし

まう方が辛いのかな」

○高校・運動場（夕）

部活動をしている生徒達。

その横を通る丈。

サッカー部の様子を覗く。

一真、ベンチに座っている。

両隣の部員が応援や声かけする中、一真は仏頂面でプレイする部員達を見ている。

丈、心配そうな顔で一真を見る。
すると、一真と目が合う。

慌てて目を逸らす丈。

踵を返し、歩きだす。

○同・校舎敷地内の道（夕）

一真の声「ねえ、ちよつと」

振り返ると、一真が丈を追いかけてきている。

一真「何でいつも見てんの？サッカー」

丈、咄嗟に言葉が出ない。

一真「サッカー部入りたいわけ？」

丈「えーつと」

一真「怪我也治ったみたいだし」

丈「ああ、怪我はもう」

一真「松葉杖って便利だよな」

丈「え？」

一真「怪我してるからっていいわけ出来るし、皆に優しくして貰えるし」

丈「俺は別に優しくなんてされなかったけど」

一真「フェイクだから？」

丈「え？」

一真「怪我なんかしてなくて、注目浴びたかっただけでしょ。可哀想な自分的な」

丈「そんなんじゃないけど・・・」

一真「そういうのって周りからバレバレ」

丈、何も言い返せない。

一真「俺にも貸してよ、松葉杖。もう使っていないでしょ」

丈、心配そうな顔で

丈「怪我でもしたのか？」

一真「・・・だったら良かったんだけど」

丈「いいわけないだろ！サッカー部のエースが！」

一真「それ、俺が今試合出れないの知ってて言ってる？嫌味？」

丈「え？何で一真・・・南が？」

一真「何でかこつちが教えて欲しい」

丈「年功序列とか？能力より些細な年齢差を重視する無能監督？」

一真、悔しそうに俯く。

丈「そんなのに負けんなよ」

一真、丈を見る。

丈「そんなくだらない事に負けるヤツじゃないだろ」

一真「お前が俺の何を知ってるわけ？」

丈「あ、えーと・・・メンタル結構強そうに見えるから」

一真「何も知らないくせに」

丈「うん、知らないな」

丈、寂しそうに笑う。

丈「松葉杖、今レンタル中なんだ。代わりにはならないけど」

丈、鞆からエイリアンのフィギュアを

出し、一真に渡す。

丈「いらなかったら売ってもいいし、捨ててもいい。それ、俺のじゃないから」

走って去って行く丈。

一真「売れないだろ、これ」

一真、フィギュアを握りしめ、丈の後ろ姿を見つめる。

○松木家・リビング（夜）

美優がキッチンでお皿にカレーを盛っている。

美優「お父さんのカレー、久しぶり」

葉助「そうだっけ」

美優「お母さんも好きだったよね。料理普段はしないのに、カレーだけはなぜかお父

さん担当で」

葉助、お皿をテーブルに運ぶ。

美優、葉助、椅子に座る。

美優「いただきます」

葉助「いただきます」

美優「福神漬は？」

葉助「あ、忘れてた」

美優「らっきょうは？」

葉助「いらない」

美優、冷蔵庫から福神漬けとらつきよ
うを出す。

美優「お母さんはらつきよう好きだったよね」

葉助「そうだったか」

美優「あとね、カレーの時は必ず一緒に牛乳
を飲むの」

葉助「うん」

美優「カレー食べたらデザートはプリンだよ
っていつも買ってきてて」

葉助「うん、そうか」

美優「やっぱりお父さんのカレーは美味しい
ね」

葉助「こればかりは何回も作ってるからな」

美優「でも私はまだ慣れないなあ。お母さん
のいないカレーの時間」

葉助「そうだよな」

美優「寂しいね」

葉助「美優、ごめんな」

美優「何で謝るの」

葉助「寂しいよな」

美優、泣きそうな顔になるが、気を取り直し

美優「ダイエット中だけど、今日はおかわりしよう」

葉「うん、いっぱい食べな」

葉助、らっきょうを一つ取り口に入れる。

苦い顔をしながらも、噛み締める。

○公園の広場・ステージ

何かを振り切るかのように一心不乱に

ダンスを踊っている丈。

そこにビニール袋を持った葉助が来る。

袋からコーラを出し、丈に見せる。

葉助「休憩しよう」

×

×

×

丈はコーラ、葉助は缶コーヒーを並んで座り飲んでいる。

葉助「だいぶ入り込んでたね」

丈「踊ってる方が無心になれるから」

葉助「あんなに動くのすごいな」

丈「動いた方が気が紛れる」

葉助「あの動きはおじさんには無理だな」

丈「それはそうでしょ」

葉助「・・・何か悩みでもあるの？」

丈「おじさんはさ、何で宇宙人を呼びたい

の？何かメリットある？」

葉助「メリットか。考えた事無かったな。い

わゆるロマンみたいな感じかな。昔観た海

外ドラマとかテレビ番組をみて、未知の世

界に憧れがあるという所かな」

丈「ふーん。俺は宇宙人が来たら地球を乗っ

取って欲しい。地球が滅亡するくらい何も

かもが変わればいい」

葉助「ノストラダムスの大予言！」

葉助、興奮気味に叫ぶ。

丈「何それ？」

葉助「あ、今の子達は知らないのか。昔地球
が滅亡するって予言した人がいたんだ。そ

して何となくその予言が当たるんじゃない
かってふんわり信じられてた」

丈「当たらなかつたんだ」

葉助「当たらなかつたね」

丈「当たれば良かったのに」

葉助「そしたら君はこの世に生まれてない
よ」

丈「それで良かったのかも」

葉助「それは困る」

丈「何で？」

葉助「だって、君のダンスが見れないじゃない
い。それはおじさんが困るな」

丈「ダンスをバズらせたいから？」

葉助「違うよ。今回は遠回しじゃない。素直
にそう思うんだ」

丈、意外な答えに喜びを抑えられず、
ふっと笑みを浮かべる。

葉助「不思議な力があると思うよ。どうして
も思い出せない、妻の事を少しだけ思い
出せた」

丈「忘れてしまう事って、記憶に無いって辛い事？」

葉助「辛い事・・・どうかな」

丈「俺は、忘れられた方が辛いんじゃないかって思ってた。恋人に振られた方みたいに。こっちは覚えてるのに向こうは忘れても何の問題もなく過ごしてる。そんなもんなのかって。だったらいっその事」

葉助「いっその事？」

丈「初めから何も無かった事だと思った方が楽なんじゃないかって」

葉助「・・・」

丈「でも、無理みたい。だって俺は覚えてるもん。楽しい事、腹が立った事、笑った顔、真剣な顔。話した事、一緒にいた時間」

葉助「うん」

丈「また取り戻せたらって思っちゃう」

葉助「そう思うのは自然な事だよ」

丈「でもどうしたらいいか分からない。混乱させたくないし、向こうは俺がいなくても

平気なら忘れたままの方がいいんじゃない
かって」

葉助、鞆から一冊のノートを出す。

葉助「これ、妻の日記帳。娘が見つけて出して来た」

丈「日記帳・・・」

葉助「読んだら記憶の手がかりになるってわかってるんだけど、読めなくて」

丈「それは奥さんの秘密が詰まっていますもんね」

葉助「それもあるけど、怖くてね」

丈「怖い？」

葉助「妻から見た自分は一体どんな人間なのかを知るのが怖い」

丈「きっと良い事ばっか書いてあると思う」

葉助「だといいんだけど」

不安げに微笑む葉助。

葉助「怖いけど、思い出したいなって思う」

丈「うん」

葉助「だって、初めて君のダンスを見て、妻

を思い浮かべた時こう思ったからから」

葉助、立ち上がる。

丈、不審な目で葉助を見る。

葉助、両手を大きく空に向けて叫ぶ

葉助「来たーーーーーっ！てね」

葉助、振り返り笑顔。

丈、その顔を見て嘖き出し笑う。

周囲にいる人が驚きチラチラとこちらを見ている。

丈「まるで宇宙人だ」

葉助「そう、宇宙人！」

丈「（笑いながら）いや、何それ」

葉助「何だろうね」

○田中家・丈の部屋（夜）

丈、テレビの画面で動画サイトを観ている。

ダンスの講座を観ながら、振りを確認し体を動かしている。

机にはダンスの本や宇宙に関する本が

置かれている。

○同・リビング（夜）

テーブルには山盛りの唐揚げとおかず。

丈と譲、向かい合い座っている。

譲「最近、帰り遅いよね」

丈「いつも遅いじゃん、母さん」

譲「いや、兄ちゃんの事」

丈「そうか？」

譲「彼女でも出来た？」

丈「うるせー、いないわ」

譲「なあんだ。いないのか」

丈「この唐揚げの量、何？」

譲「さあ」

丈「今日、母さん遅いんだっけ」

玄関ドアを開ける音がする。

リビングに入って来る愛子。

愛子「ただいま」

譲「おかえり」

丈「はい」

愛子「丈、はい。じゃないでしょ？おかえり
でしょ」

丈「・・・おかえり」

リビングに入って来る山口清（51）。

山口「お邪魔します」

愛子「この人、お母さんの社交ダンス仲間の

山口さん。今度発表会が近くてその打ち合
わせに来て貰ったの」

声を弾ませている愛子。

譲「社交ダンスなんか行ってたの？」

愛子「最近行き始めてね。実は昔ダンスやつ
てたのよ」

丈「ダンス・・・」

山口「お母さん、めっちゃくちやセンスいいん
ですよ」

譲「へえー」

丈「・・・」

×

×

×

食卓を囲む4人。

山口「すごく美味しいです」

愛子「良かったー」

譲「唐揚げ、レモンかけるよ」

愛子「かけないわよ、レモンなんて」

丈「じゃあ何でレモン置いてあんの」

譲「かけた方が体にいいよ」

山口「僕はいつもかけてます」

愛子「かけましょ、沢山かけましょ」

愛子、唐揚げにまんべんなくレモンを絞る。

丈と譲、顔を見合わせて笑う。

愛子「丈、もう足はすっかりいいのね？」

丈「足？ああ、うん」

愛子「大事な体なんだから気を付けなさいよ。

あんたも大会とかあるんでしょ」

丈、面食らった顔。

丈「ああ・・・ありがとう」

○松木家・リビング（夜）

ソファに座りダンスの基礎の本を読んでいる葉助。

テーブルには理恵の日記。

葉助、意を決して理恵の日記を手に取り
る。

中をめくり読み始める。

○高校・運動場

サッカー部が練習している。

○同・運動場近くの道

制服姿の一真が一人歩いている。

一真の足元にサッカーボールが転がっ
て来る。

少し離れた場所に丈が立ち一真を見て
いる。

ボールを拾う一真。

丈の方にボールを転がす一真。

丈、来たボールをそのまま蹴ろうとし
て空振りする。

遠くに行ったボールを拾ってまた一真
に向かって蹴る丈。

ボールは力なくコロコロと全く違う方
へ転がる。

一真、ボールを拾い、丈の近くまで来
る。

一真「下手くそ」

丈「サッカーはあんまり得意じゃないから」

一真「何？サッカー部に入るの」

丈「入らない。球技は苦手。それにもうエー
スがいるし」

一真「・・・」

丈「エースがサボっていいの？」

一真「エースじゃないし」

丈「今はね」

一真「何なんだよ」

丈「俺が何て呼ばれてるか知ってる？」

一真、バツが悪そうな顔をする。

丈、その顔を見て微笑む。

丈「宇宙人って呼ばれてる」

一真「知ってるけど・・・」

丈「宇宙人ってさ、未知の世界からやって来るわけわからない存在じゃん」

一真「・・・」

丈「それって、関わったら新しい未知の経験が出来そうじゃない？」

一真「何の事？」

丈「宇宙人とサッカーしてみたいと思った事ない？」

一真「・・・あるかも」

丈、嬉しくて笑顔。

スマホで音楽をかける。

足元でステップを踏み始める。

一真の前で踊り始める丈。

丈の姿を見て驚く一真の顔。

○公園の広場（夕）

人通りが少なくなり、静けさに包まれている。

○同・ステージ（夕）

静けさに音楽が響く。

音楽に合わせて丈が軽快に踊っている。
その姿を少し離れた所から見ている葉
助。

右手に松葉杖を持っている。

葉助に気づく丈。

葉助、右足を引きずりながら近づいて
行く。

丈「えーっと、その松葉杖は？」

葉助「本当に使う時が来ちゃったよ。返却は
しばらく先で」

丈「ふざけてるわけじゃないよね」

葉助「昨日の朝、階段を踏み外して足を怪我
しました」

丈「加齢による衰えだね」

葉助「否定はしません」

丈「ダンスの練習はしばらく無理だね」

葉助「いや、出来る」

丈「無理でしょ、怪我してるのに」

葉助「松葉杖を使って踊る。松葉杖ダンス、

考えて。バズるかも」

丈、一瞬、なるほどという顔をするが、
我に返り

丈「いや、無理無理——」

松葉杖を使って踊ろうとする葉助。

それを止める丈。

日が暮れ辺りは暗くなって行く。

丈のスマホの音楽が軽快に流れ続けて
いる。

タイトル「宇宙のダンス」

おわり